

菊池君

石川啄木

青空文庫

一

私が釧路の新聞へ行つたのは、恰度一月下旬すゑの事、寒さの一番酷しい時で、華氏寒暖計が毎朝零下二十度から三十度までの間を昇降して居た。停車場ていしやばから宿屋まで、僅か一町足らずの間に、夜風の冷に頤ひえおとがひを埋めた首巻が、呼氣いきの湿氣しめりで真白に凍つた。翌朝あくるあさ目を覚ました時は、雨戸の隙を潜つて空寒うそさむく障子を染めた暁の光の中に、石油だけは流石に凍らぬと見えて、心を細めて置いた吊洋燈つりランプが昨夜の儘に薄りと点つて居たが、茶を注いで飲まずに置いた茶碗が二つに割れて、中高に盛り上つた黄色の水が傍かたはらに転げ出して居た。火鉢に火が入つて、少しは室へやの暖まるまでと、身体を縮めて床の中で待つて居たが、寒国の人は総じて朝寝をする、漸々やうやう女中が入つて来たのは、ものの一時間半も経つてからで、起きて顔を洗ひに行かうと、何気なしに取上げた銀鍍金めつきの石鹼函しゃばんぼこは指に氷着く、廊下の舗板しきいたが足を移す毎にキシ／＼と鳴く、熱過ぎる程の湯は、顔を洗つて了ふまでに夏の川水位に冷えた。

雪は五寸許りしか無かつたが、晴天はれ続きの、塵ひとひら一片浮ばぬ透明の空から、色なき風が

ヒユウと吹いて、吸ふ息毎に鼻の穴が塞^{つま}る。冷たい日光^{ひざし}が雪に照返つて、家々の窓硝子を、寒さに慄^{おび}えた様にギラつかせて居た。大地は底深く凍つて了つて、歩くと鋼鉄の板を踏む様な、下駄の音が、頭まで響く。街路^{みち}は鏡の如く滑かで、少し油断をすると右に左に^{すべ}に^さる、大事をとつて、足に力を入れると一層^{いっしやう}に^さる。男も、女も、路行く人は皆、身分不相応に見える程、厚い、立派な防寒外套を着けて、軽々と刻み足に急いで居た。荷馬櫓の馬は、狭霧^{ぎり}の様な呼^いき^きを被つて氷の玉を聯^{たて}ねた鬣^{がみ}を、寒い光に波打たせながら、風に鳴る鞭を喰^{くら}つて勢ひよく駈けて居た。

二三日して、私は、洲崎町の或下宿へ移つた。去年の春までは、土地^{とち}で少しは幅を利かした、さる医師の住つて居た家とかで、室も左程に悪くは無し、年に似合はず血色のよい、布袋^{ほてい}の様に肥満^{ふと}つた、モウ五十近い氣丈の主婦^{おかみ}も、外見^{みかけ}によらぬ親切者、女中は小さいのを合せて三人居た。私が移つた晩の事、身体^{からだ}の馬鹿に大きい、二十四五の、主婦にも劣らず肥満^{ふと}つた、小さい眼と小さい鼻を掩ひ隠す程頬骨が突出て居て、額の極めて狭い、氣の毒を逾越して滑稽に見える程不恰な女中が来て、一時間許りも不問^{とはずがたり}語をした。夫に死なれてから、一人世帯を持つて居て、釧路は裁縫^{したてちん}料の高い所であれば、毎月若干^{いくらか}宛の貯蓄もして居たのを、此家^{ここ}の主婦が人手が足らぬといふので、強^{たつ}ての頼みを拒み難く、手伝に

来てからモウ彼は半年になると云つた様な話で、「普通の女中ぢや無い。」といふ事を、私に吞込ませようとしたらしい。後で解つたが、名はお芳と云つて、稼ぐ時は馬鹿に稼ぐ、怠ける時は幾何主婦いくらに怒鳴られても平気で怠ける、といふ、随分な気紛れ者であつた。

取分けて此下宿の、私に氣に入つたのは、社に近い事であつた。相応の賑ひを見せて居る真砂町のおほとほり大達とは、恰度背中合せになつた埋立地の、両側空地の多い街路みちを僅か一町半許りで社に行かれる。

社は、支庁坂から真砂町を突切つて、海岸へ出る街路の、トある四角に立つて居て、小いながらも、ツイ此頃落成式を挙げた許りの、新築の煉瓦造、（これが此社に長く居る人達の、北海道に類が無いと云ふ唯一つの誇りであつた。）澄み切つた冬の空に、燃える様な新しい煉瓦の色の、廓くつきり然と正しい輪廓を描いてるのは、何様木造の多い此町では、多少の威厳を保つて見えた。主筆から見せられた、落成式の報告みたいなものの中に、「天地一白の間に紅梅いちだ一朵の美觀を現出したるものは即ち我が新築の社屋なり。」と云ふ句があつて、私が思はず微笑したのを、今でも記憶おぼえて居る。玄関から上ると、右と左が事務室に宿直室、奥が印刷工場で、事務室の中の階段はしごを登れば、二階は応接室と編輯局ふたまたの二室。編輯局には、室の広さに釣合のとれぬ程大きい暖炉ストーブがあつて、私は毎日此暖炉の勢ひ

よく燃える音を聞き乍ら、筆を動かしたり、鋏と糊を使ふ。外勤の記者が、唇を紫にして顫へ乍ら歸つて来ると、腰を掛ける前に先づ五本も六本も薪を入れるので、一日に二度か三度は、必ず暖炉が赤くなつて、私共の額には汗が滲み出した。が、夕方になつて宿に歸ると、何一つ室を賑かにして見せる裝飾が無いので、割合に広く見える。二階の八畳間に、火鉢が唯一個、幾何炭をつぎ加して、青い焰の舌を断間なく吐く程火をおこしても、寒さが背から覆被さる様で、襟元は絶えず氷の様な手で撫でられる様な氣持がした。字を五つ六つ書くと、筆の尖がモウ堅くなる。インキ瓶を火鉢に縁に載せて、瓶の口から水蒸氣が立つ位にして置いても、ペンに含んだインキが半分もなくならぬうちに凍つて了ふ、葉書一枚書くにも、それはく億劫なものであつた。初めての土地で、友人と云つては一人も無し、慙う寒くては書を読む氣も出ぬもので、私は毎晩、唯モウ手の甲をひつくり返しおつくり返し火に焙つて、火鉢に抱付く様にして過した。一週間許り経つて、私は漸々少し寒さに慣れて来た。

二月の十日頃から、怎やら寒さが少しづつ緩み出した。寒さが緩み出すと共に、何処から来たか知らぬが、港内には流水が一杯集つて来て、時々雪が降つた。私が来てから初めての記者月例会の開かれたのも、恰度一尺程も雪の積つた、或土曜日の夕であつた。

二

釧路は、人口と云へば僅か一万五千足らずの、漸々発達しかけた許りの小都会なのに、
怎^{どう}したものか新聞が二種^{ふたつ}出て居た。

私の居たのは、「釧路日報」と云つて、土地^{ところ}で人望の高い大川道会議員の機関であつた。
最初は紙面が半紙二枚程しかないのを、日曜々々に出して居たのださうだが、町の発達に
つれて、七年の間に三度^{みた}四度^{よたび}拡張した結果、私が行く一週間許り前に、新築社屋の落成式
と共に普通の四頁新聞になつた。無論これまでに漕ぎつけたのは、種々^{いろいろ}な関係が結びつ
けた秘密の後援者があるからで、新聞独^{ひとり}自の力では無いが、社の経済も案外巧く整理さ
れて居て、大川社長の人望と共に、「釧路日報」の信用も亦、町民の間に余程深く植ゑつ
けられて居た。編輯局には、主筆から校正^{たつた}までで唯五人。

モ一つは「釧路毎日新聞」と云つて、出来てから漸々半年位にしかならず、社も裏長屋
みたいな所で、給料の支払^いが何日でも翌月になるとか云ふ噂、職工共の紛^{ごたごた}擾^たが珍しくな
く、普通^{あたりまへ}の四頁の新聞だけれど、広告が少くて第四面に空^{あき}所が多く、活字が足らなくて仮

名許り沢山使ふから、見るから醜きたない新聞であつた。それでも記者は矢張やはり五人居た。

月例会と云ふのは、此両新聞の記者に、札幌、小樽、旭川などの新聞の支社に来て居る人達を合せて、都合十三四人の人が、毎月一度宛集るといふので、此月のは、私が来てから初めての会ではあり、入社の挨拶を新聞に載せただけで、何処へも改めては顔を出さずに居たから、知らぬ顔の中へ行くんだと云つた様な気が、私の頭脳あたまを多少他所行よそゆきの心持にした。午後四時からと云ふ月番幹事の通知だったので、三時半には私が最後の原稿を下した。

『今日は鹿島屋だから、市子のお酌で飲める訳だね。』

と云つて、主筆は椅子を暖炉ストウブに向ける。

『然し芸妓も月例会に出た時は、大変大人しくして居ますね。』

と八戸君が応じた。

『その筈さ、人の悪い奴許り集るんだもの。』

と笑つて、主筆は立上つた。『芸者に記者だから、親類同志なんだがね。』

『成程、何方どちらも洒しゃあ々しやあとしてますな。』

と、私も笑ひながら立つた。皆が硯箱に蓋をしたり、袴の紐を締直したり、蓑タバコを唧くはへて外

套を着たりしたが、三面の外交をして居る小松君が、突然、

『今度また「毎日」に一人入ったさうですね。』と言つた。

『然うかね、何といふ男だらう？』

『菊池ツて云ふさうです。何でも、釧路に居る記者の中では一番年長者としよりだらうツて話でしたよ。』

『菊池兼治かねはると謂ふ奴ぢやないか？』と主筆が喙くちを容れた。

『兼治？ 然うですく、何だか武士さむらいの様な名だと思ひました。』

『ぢや何だ、真黒な腮髭あごひげを生やした男で、放浪者ごろつきみたいな？』

『然うですか、私は未だ逢まはないんですが。』

『那あんな男なら、何人先方むかうで入れても安心だよ。何日いつだツたか、其菊池が、記者なり小使なりに使つて呉れツて、俺の所へ来た事があるんだ。可哀相だから入れようと思つたがね、』と、入口の方へ歩き出した。『前に来た時と後に来た時と、辻褄が合はん事を云つたから、之は怪しいと思つて断つたさ。』

私は、然し、主筆が常に自己おのれと利害の反する側の人を、好く云はぬ事を知つて居た。

『先方むかうが六人で、此方こつちよりは一人増えたな。』と云つた風な事を考へて玄関を出たが、

『君。二面だらうか、三面だらうか？』

と、歩きながら小松君に問ひかけた時は、小松君は既に別の事を考へて居た。

『何がです？』

『菊池がさ。』

『さあ何方どちらですか。桜井の話だと、今日から出社する様に云つてましたがね。』

私共が、ドヤ／＼と鹿島屋の奥座敷に繰込んだ時は、既もう七人許り集つて居た。一人二人を除いては、初対面の人許りなので、私は暫時さんじの間名刺の交換に急がしかつたが、それも一しきり済んで、苺に火をつけると、直ぐ、真黒な腮鬚ひげの男は未だ来て居ないと気がついた。人々はよく私にも話しかけて呉れた。一座の中でも、背の低い、色の黒い、有るか無きかの髻を生やした、洋服でんち扮装ぶせうの醜みにく男が、四方八方に愛嬌を振舞いては、軽い駄洒落を云つて、顔に似合はぬ優しい声でキヤツ／＼と笑ふ。

十分許り経つて、「毎日」の西山社長と、私より一月程前に東京から来たといふ日下部編輯長とが入つて来た。日下部君は、五尺八寸もあらうかといふ、ガツシリした大男で、非常な大酒家だと聞いて居たが、如何様眼いかさまは少しドンヨリと曇つて、服装みなりは飾気なしの、新らしくも無い木綿の紋付を着て居た。

西山社長は、主筆を兼ねて居るといふ事であつた。七子ななこの羽織に仙台平のリウとした袴、太い丸打の真白ましろな紐を胸高に結んだ態さまは、何処かの壮士芝居で見た悪党弁護士を思出させた。三十五六の、面炮にきびだらけな細顔で、髯が無く、銀縁の近眼鏡をかけて居たが、眼鏡越しに時々狐疑うたがひ深い様な目付をする。

『徐々そろそろ始めようぢやありませんか、大抵揃ひましたから。』

と、月番幹事の志田君（先程から愛嬌を振舞つてゐた、色の黒い男）が云ひ出した。

臆やがて膳部が運ばれた。「入交いりまぜになつた方が可からう。」と云ふ、私の方の主筆の発議はつぎで、人々は一時ドヤドヤと立つたが、

『男振の好い人の中に入ると、私の顔が一層悪く見えて不可いかんけれども。』

と、笑ひながら、志田君は私と西山社長との間に座つた。

酒となると談話が急に燥はしやぐ、其処にも此処にも笑声が起つた、五人の芸妓の十の袂が、銚子と共に急がしく動いて、艶なまめいた白粉の香が、四角に立てた膝をくづさせる。点けた許りの明るい吊洋燈つりランプの周匝あたりには、莧の煙が薄く渦を巻いて居た。

親善を厚うするとか、相互の利害を議するとか、連絡を図るとか、趣意すこいは頗る立派であつたけれど、月例会は要するに、飲んで、食つて、騒ぐ会なので、主筆の所謂人の悪い奴

許りだから、随分と方々に円滑な皮肉が交換されて、其度にさも面白相な笑声が起る。意とんだこと外事を素破抜かれた芸妓が、対手が新聞記者だけに、弱つて了つて、援助を朋輩すくひに求めてるのもあれば、反対に芸妓から素破抜かれて頭を搔く人もある。五人の芸者の中、其処からも此処からも名を呼び立てられるのは、時々編輯局でも噂を聞く市子と謂ふので、先刻膳さつきを運ぶ時、目八分に捧げて、真先まつさきに入つて来て、座敷の中央へ突立つた儘、「マア怎うしよう、私は。」と、仰山に驚いた姿態しなを作つた妓こであつた。それは、私共が皆一ひとかたまりになつて、障子際に火鉢を囲んで居たから、御膳の据場所が無かつたからで。十六といふ齡には少し老せて居るが、限りなき愛嬌を顔一杯に漲らして、態わざとらしくらぬ身振が人の氣を引いた。

志田君は、盃を下にも置かず、相不変愛嬌あひかはらずを振舞いて居たが、お酌に廻つて来た市子を捉へて私の前に座らせ、両手の盃を一つ私に献さして、

『市ちゃん、此方このかたは今度「日報」へお出になつた橘さんといふ方だ、お年は若し、情なさけは深し、トまでは知らないが、豪い方だからお近付になつて置け。他日あとになつて悪い事は無いぞ。』

『アラ然うですか。お名前は新聞で承はつてましたけれど、何誰どなたかと思つて、遂……』と

優容しとやかに頭を下げた。下げた頭の挙らぬうちに、

『これはおかめ屋の市ちゃん。たつた唯三度しか男と寝た事が無いさうです。然うだつたね、市ちゃん？』

と云つて、志田君はキヤツ／＼と笑ふ。

『おかめ屋なんて、人を。酷い事旦那は。』

と市子は怖い目をして見せたが、それでも志田君の貸した盃を受取つて、盃洗に浄めて私に献さした。

『印度の炭山たんざんの旦那のお媒介とりもちですから、何卒どうぞ末長く白ツぱくれない様に……。』

『印度の炭山の旦那は酷い。』と志田君の声が高かつたので、皆此方こつちを見た。『いくら私
が色が黒いたつて、随分念を入れた形容をしたもんだ。』

一座の人は声を合せて笑つた。

私は初めての事でもあり、且つは、話題はなを絶やさぬ志田君と隣つて居る故か、自おのづと人の目について、返せども、／＼、盃が集つて来る。生しやうらい来き余あり飲いぬ口なので、顔は既もうポツポツと上気して、心臓の鼓動が足の裏までも響く。二つや三みつなら未まだしもの事、私の様な弱い者には、四つ、五つと盃の列んだのを見ると、醒め果てた恋に向ふ様で、モウ手も触つけ

たくない。芸妓には珍しく一滴も飲まぬ市子は、それと覺つてか、密と盃洗を持つて来て、志田君に見られぬ様に、一つ宛空けて呉れて居たが、いつしか発覺して、例の円転自在の舌から吹聴に及ぶ。「市ちゃんも仲々腕が上つた」とか、「今の若い者は、春秋に富んで居る癖に惚れ方が性急だ」とか、「橘さんも隅には置けぬ」とか、一座は色めき立つて囂々と騒ぐので、市子は、

『私此方の為にしたんぢやなくて、皆さんが盃を欲しさうにして被居るから、空けて上げたのですわ。』

と防いでも見たが、遂々顔を真赤にして次の室へ逃げた。私も皆と一緒に笑つた。暫時してから市子は軽い咳払をして、怎やら取済した顔をして出て来たが、いきなり復私の前に坐つた。人々は、却つて之を興ある事にして、モウ市子くと呼び立てになつた。『菊池さんて方が。』と、女中が襖を開けて、敷居際に手をついた。話がバタリと止んで、視線が期せずして其方に聚る。又ツと許り髭面が入つて来た。

私は吸差の莚を灰に差した、人々は盃を下に置いた。西山社長は急しく居住を直して、此新来の人を紹介してから、

『馬鹿に遅いから来ないのかと思つて居た。』

と、さも容ようだい体ぶつて云つた。

『え、遅くなりました。』

と、菊池君は吃る様に答へて、変な笑ひを浮べ乍ら、ヂロ／＼一座を見廻したが、私とは斜はすに一番遠い、末座の空席に悠ゆつたり然と胡坐あぐらをかく。

皆は、それとなく此人の爲す所を見て居たが、菊池君は両手に膝頭つかを攫んで、俯うつむいて自分の前の膳部を睨んで居るので、誰しも話しかける機会を失つた。私は、空になつて居た盃を取上げて、「今来た方へ。」と市子に渡した時、志田君も殆んど同時に同じ事を云つて盃を市子に渡した。市子は盃を二つ捧げて立つて行つたが、

『彼方あちらのお方からお取次とりごで△います。』

『誰方どなた?』

と、菊池君は呟く様に云つて顔を挙げる。

『アノ』と、私を見た盃を隣へ逸らして、『志田さんと仰しやる方。』

菊池君は、両手に盃を持った儘、志田君を見て一寸頭を下げた。

『モ一つ其お隣の、……………橘さん。』と目を落す。

菊池君は私にも叩頭おしぎをして、満々みなみと酌を享けたが、此挙動やうすは何となく私に興を催させ

た。

浮浪漢ごろうつきみたいなと主筆が云つた。成程、新聞記者社会には先づ類の無い風采で、極く短く刈り込んだ頭と、真黒に縮れて、乳ちの辺あたりまで延びた頬と顎あごの髭が、皮肉家に見せたら、顔が逆さになつて居るといふかも知れぬ。二十年も着古した様で、何色とも云へなくなつた洋服の、上衣の釦が二つ迄取れて居て、窄袴ズボンの膝は、両方共、不手際に丸く黒羅紗のつぎが当てであつた。剰あまつさくへ洋襪も足袋も穿くいて居ず、膝つかを攫つかんだ手の指の太さは、よく服み装なりと釣合つて、浮浪漢か、土方の親分か、何いづれは人に喜ばれる種類の人間に見せなかつた。然し其顔は、見なれると、髭で脅して居る程ではなく、形の整つた鼻うづ、滋うるみを帯びて威のある眼、眼尻に優しい情こもが罩こもつて、口の結びは少しく顔の締りを弛ゆるめて居るけれど、――若し此人に立派な洋服を着せたら、と考へて、私は不意に、河野広中の写真を何処かで見
た事を思出した。

菊池君から四人目、恰度私と向合むかひあつて居て、芸妓を取次に二三度盃の献酬やりとりをした日下部君は、時々此方こつちを見て居たが、遂々盃を握つて立つて来た。ガツシリした身体を市子と並べて坐つて、無作法に四辺あたりを見廻したが、

『高い声では云へぬけれど、』と低くもない声で云つて、『僕も新参者だから、新しく来

た人で無いと味方になれん様な気がする。』

『私の顔は随分古いけれど、今夜は染直したから新しくなつたでせう。』と、志田君は、首から赤銅色になつた酔顔を突出して笑つた。

市子は、仰ぐ様にして横から日下部君の顔を見て居たが、

『私一度貴方あなたにお目にかかつてよ、ねえ。』

『さうか、僕は気が附かなかつた。』

『マア以前このまへも家へ入いつた癖に、……薄情な人ね、此方このかたは。』

と云つて、夢見る様な目を私に向けて、微かな笑ひを含む。

『橘やさんは余り飲やらん方ですね。』と云つた様な機き会かけから、日下部君と志田君の間に酒

の論が湧いて、寢酒の趣味は飲んでる時よりも、飲のんで了しまつてからに有る、但しこれは独

身者でなくては解りかねる心持だと云ふ志田君の説が、随分と立入ことばつた語を以て人々に腹

を抱かかへさせた。日下部君は、朝に四合、晩に四合飲のまなくては仕事が出来ぬといふ大酒家

で、成程先刻さつきから大分傾かけてるに不か拘かはらず、少しも酔つた風が見えなかつたが、

『僕は女にかけては然程慾さほどの無い方だけれど、酒となつちや然うは行かん。何処かへ一寸飲のみに行つても、銚子さしを握にぎつて見て、普通より太いと満足するが、細いとか軽いかする

と、モウ氣を悪くする。錢の無い時は殊にさうだね。』

『アツハハハ。』

と突然大きな笑声がしたので、人々は皆顔をあげた。それは菊池君であつた。

『私もそれならば至極同感ですな。』

と調子の悪い太い声。手は矢張胡坐あぐらの両膝を攫さらんで、グツと反そりかへ返かへつて居た。

菊池君はヤヲラ立ち上つて、盃を二つ持つて来たが、「マア此方こつちへ来給へ、菊池君。」

と云ふ西山社長の声がしたので、盃を私と志田君に返した儘其方そつちへ行つて了つた。西山は何時しか向うの隅の方へ行つて、私の方の主筆と、「札幌タイムス」の支社長と三人で何か話合つて居た。

座敷の中まんなか央なかが、取片付けられるので、何かと思つたら、年長としかさな芸妓が三人三味線を叩ひかへて入口の方に列んだ。市子が立つて踊が始まる。

「香に迷ふ」とか云ふので、もとより端物ではあるけれど、濃艶な唄の文句が酔ふた心をそれとなく唆そそのかす。扇の銀地に洋燈の光が映えて、目の前に柔かな風を匂はせる袂長そでながく、そちら向けば朱の雲の燃ゆるかと眩まぶしき帯の立矢の字、裾すその捌さばきが青畳に紅の波を打つて、トンと軽き足拍子毎に、チラリと見える足袋は殊更白かつた。恋に泣かぬ女の眼は若い。

踊が済んだ時、一番先に「巧い。」と胴間声を上げて、菊池君はまた人の目を引いた。
 「実に巧い、モ一つ、モ一つ。」と雀躍こをどりする様にして云つた小松君の語ことばが、三四人の反響を得て、市子は再立またつ。

此度のは、「権兵衛が種蒔けや烏がほじくる、」とか云ふ、頗すこぶる道化たもので「腰付がうまいや。」と志田君が呟ささやいて居たが、私は、「若し芸妓の演芸会でもあつたら此妓このこを賞めて書いてやらう。」と云つた様な事を、酔ふた頭に覚束なく考へて居た。

踊の済むのを機きつかけ会に飯が出た。食ふ人も食はぬ人もあつたが、飯が済むと話がモウ勢はばんで来ない。帰る時、誰やらが後うしろから外套を被かけて呉れた様だつたが、賑やかに送り出されて、戸外そとへ出ると、菊池君が私の傍そばへ寄つて来た。

『左の袂、左の袂。』

と云ふ。私は、何を云ふのかと思ひ乍ら、袂に手を入れて見ると、何かしら柔かな物が触つた。モウ五六間も門口の瓦斯燈がすとうから離れて居るので、よくは見えなかつたが、それは何か美しい模様のある淡紅色ときいろの手巾はんけちであつた。

『ウアツハハハ。』と大きな声で笑つて、菊池君は大跨に先に立つて行つたが、怎やら少しも酔つて居ない様に見えた。

休坂^{やすみざか}を下りて真砂町の通りへ出た時は、主筆と私と八戸君と三人限^{きり}になつて居た。

『随分贅沢な会を行いますねえ。』と私が云ふと、

『ナニあれでも一人一円五十銭位なもんです。芸妓は何^どの料理屋でも、口ハで寄附させますから。』と主筆が答へた。私は何だか少し不愉快な感じがした。

一二町歩いてから、

『可^を笑な奴でせう、君。』

と主筆が云ふ。私は、市子の事ぢやないかと、一寸狼狽^{うろた}へたが、

『誰がです?』

と何気なく云ふと、

『菊池ツて男がさ。』

『アツハハハ。』

と私は高く笑つた。

翌日は日曜日、田舎の新聞は暢気なもので、官衙や学校と同じに休む。私は平日の

如く九時頃に目を覚ました。恐ろしく喉が渴いて居るので、頭を擡げて見廻したが、下に持つて行つたと見えて鉄瓶が無い。用の無いのに起きるのも詰らず、寒さは寒し、さればと云つて床の中で手を拍つて、女中を呼ぶのも変だと思つて、また仰向になつた。幸ひ其処へ醜女^{みたくなし}の芳ちゃん^{みたくなし}が、新聞を持つて入つて来たので、知つてゐる癖に『モウ何時だい』と聞くと、

『まだ早いから寝て居なされよ、今日は日曜だもの。』

と云つて出て行く。

『オイ、喉が渴いて仕様が無いよ。』

『そうですか。』

『そうですかぢやない。真に渴くんだよ、昨晚少し飲んで来たからな。』

『少しなもんですか。』

と云つたが、急にニヤ／＼と笑つて立戻つて来て、私の枕頭に膝をつく。また戯れるなどと思ふと、不恰好な赤い手で蒲団の襟を敲いて、

『私に一生の願ひがあるで、貴方聴いて呉れますか？』

『何だい？』

『マアさ。』

『お湯を持つて来て呉れたら、聴いてやらん事もない。』

『持つて来て上るで。あのね、』と笑つたが『貴方好え物持つてるだね。』

『何をさ？』

『白ツぱくれても駄目ですよ。貴方の顔さ書いてるだに、半可臭え。』

『喉が渴いたとか？』

『戯談じようだんば止しなされ。これ、そんだら何ですか。』と手を延べて、机の上から何か取る様子。それは昨晚ゆうべの淡紅色ときいろの手巾はんけちであつた。市子が種蒔しりを踊つた時の腰付こしが、チラリと私の心に浮ぶ。

『嗅うんで見さいな、これ。』と云つて自分で嗅いで居たが、小さい鼻がひこづいて、目が恍然うつとりと細くなる。慥こん好ない香におひを知らないんだなと思つて、私は何だか気の毒な様な氣持になつたが、不意と「左の袂、左の袂」と云つた菊池君を思出した。

『私わし貰もらつてくだよ。これ。』と云ふ語ことばは、満更みんか揶揄えうふつもり許りでも無いらしい。

『やるよ。』

『本當がね。』と目を輝かして、懷に捻じ込む真似をしたが、

『貴方^{あんた}が泣くべき。』と云つて、フワリと手巾を私の顔にかけた儘、バタ／＼出て行つた。

目を瞑ると、好い香^{におひ}のする葩^{はなびら}の中に魂が包まれた様で、自分の呼氣^{いき}が温かな靄^{もや}の様に顔を撫でる。

乎^{ほう}として目を開くと、無際限の世界が、唯モウ薄^{うす}光^{あかり}の射した淡紅色の境界で、凝^{じつ}として居ると遙か／＼向ふにポツチリと黒い点、千里の空に鷺が一羽、と思ふと、

段々近いて来て、大きくなつて、世界を掩ひ隠す様な翼が、目の前に来てパツと消えた。

今度は楯円形な翳^{かげ}が横から出て来て、煙の様に動いて、もと来た横へ逸^それて了ふ。ト、

淡紅色の襖^{からかみ}がスイと開いて、真黒な髭面の菊池君が……

足音がしたので、急いで手を出して手巾を顔から蒲団の中へ隠す。入つて来たのは小さい

方の女中で、鉄瓶と茶器を私の手の届く所に揃へて、出て行く時一寸立止つて枕^{まくら}頭^{もと}を見廻した。お芳の奴が喋つたなと感付く。怎したものか、既茶^{もう}を入れて飲まうと云ふ氣も

しない。

昨夜の事が歴々^{まざまざ}と思出された。女中^{からかみ}が襖を開けて髭面の菊池君が初めて顔を出した時

の態^{さま}が、目に浮ぶ。巖^{いは}の様な日下部君と芍薬^{はくやく}の様な市子の列んで坐つた態、今夜は染直した

たから新しくなつたでせうと云つて、ヌツト突出した志田君の顔、色の浅黒い貧相な一人

の芸妓が、モ一人の袖を牽ひいて、私の前に坐つて居る市子の方を顙あじで指し乍ら、何か密ひそひ々話そし合つて笑つた事、菊池君が盃盃を持つて立つて来て、西山から声をかけられた時、怎やら私達の所に座りたさうに見えた事、雀こをどり躍する様に身体を揺がして、踊をモ一つと所望した小松君の横顔、……それから、市子の顔を明はつきり瞭瞭描描いて見たいと云ふ様な気がして、折角努めて見たが、怎してか浮んで来ない。今度は、甚どんな気がしてアノ手巾を私の袂に入れただらうと考へて見たが、否、不図すると、アレは市子でなくて、名は忘れたが、ソレ、アノ何とか云つた、色の浅黒い貧相な奴が、入れたんぢやないかと云ふ気がした。が、これには自分ながら直ぐ可笑くなつて了つて、又しても「左の袂、左の袂」を思ひ出す。……

「ウアツハハ」と高く笑つて、薄く雪ゆき明あかりのした小路を、大跨に歩き去つた。——其後姿が目に浮ぶと、（此朝私の頭脳あたまは余程空想的になつて居たので、）種いろん々な事が考へられた。

大跨に、然うだ、菊池君は普通なみの足調あしじりでなく、屹度大跨に歩く人だ。無雜作に大跨に歩く人だ。大跨に歩くから、時としてドブリと泥ぬかるみ濘みへ入る、石に躓つまつく、真暗な晩には溝おつにも落おつこちる。若しかして溝が身長みたけよりも深いとなると、アノ人の事だから、其溝の中を

大跨に歩くかも知れない。

「溝の中を歩く人。」と口の中で云つて、私は思はず微笑した。それに違ひない、アノ洋服の色は、饅^すえた、腐つた、溝の中の汚水の臭気で那^{あんな}に変色したのだ。手！アノ節くれ立つた、恐ろしい手も、溝の中を歩いた証拠だ。烈しい労働の痛苦が、手の指の節々に刻まれて居る。「痛苦の……生——活——の溝、」と、再^{また}口の中で云つて見たが、此語^{ことば}は、我乍ら鋭い錐で胸をもむ様な、連想を起したので、狼狽^{うつた}へて「人生の裏路を辿る人。」と直す。

何にしても菊池君は失敗を重ねて来た人だ、と、勝手に断定して、今度は、アノ指が確かに私の二本前太いと思つた。で、小児^{こども}みたいに、密^{そつ}と自分の指を蒲団の中から出して見たが、菊池君は力が強さうだと考へる。ト、私は直ぐ其喧嘩の対手を西山社長にした。何と云ふ訳も無いが、西山の厭な態度と、眼鏡越の狐疑^{うたがひ}深い目付とが、怎しても菊池君と調和しない様な気がする。——西山が馬鹿に社長風を吹かして威張るのを、「毎日」の記者共が、皆蔭で悪く云つて居乍ら、面と向つてはペコペコ頭を下げる。菊池がそれを憤慨して、入社した三日目に突然、社長の頬^{ほつぺた}片を擲る。社長は蹣跚^{よろよろ}と行つて椅子に倒れ懸りながら、「何をするツ」と云ふ。其頭にポカ／＼と拳骨が飛ぶ、社長は卓^{タイプル}子の下

を這つて向うへ抜けて、拔^{きりぬき}萃^きに使ふ鋏を逆手に握つて、真蒼な顔をして、「発狂したか？」と顫声で叫ぶ。菊池君は両手を上衣の衣^{ほけつと}囊^{ふくろ}に突込んで、「馬鹿な男だ喃^{なあ}。」と吃る様に云ひ乍ら、悠々と「毎日」を去る。そして其足で直ぐ私の所へ来て、「日報」に入れて呉れないかと頼む。——思はず声を立てて私は笑つた。

が、此妄想から、私の頭脳^{あたま}に描かれて居る菊池君が、怎^{どう}やら、アノ髭で、權力の圧迫を春風と共に受流すと云つた様な、氣概があつて、義に堅い、豪傑肌の、支那的色彩を帯びて現れた。私は、小さい時に讀んだ三国志中の人物を、それか、これかと、此菊池君に当嵌めようとしたが、不図、「馬賊の首領に慙^{ごん}男は居ないだらうか。」と云ふ氣がした。

馬賊……滿洲……と云ふ考へは、直ぐ「遠い」と云ふ感じを起した。ト、女中が不意に襖を開けて、アノ髯面が初めて現れた時は、菊池君は何処か遠い所から來たのぢや無かつたらうかと思はれる。考へが直ぐ移る。

昨夜^{ゆうべ}の座敷の様子が、再^{また}鮮かに私の目に浮んだ。然うだ、菊池君の住んで居る世界と、私達の住んで居る世界との間には、余程の間^{へだたり}隔がある。「ウアツハハ。」と笑つたり、「私もそれなら至極同感ですな。」と云つたり、立つて盃を持つて來たりする時は、アノ人が自分の世界から態^{わざわざ}々出掛けて來て、私達の世界へ一寸入れて貰はうとするのだが、

生憎^{あいにく}唯人の目を向けさせるだけで、一向^{ききめ}効力が無い。菊池君は矢張、唯一人自分の世界に居て、胡坐をかけた膝頭を、両手で攫^{じつ}んで、凝然^{じつ}として居る人だ。……………

ト、今度は、菊池君の顔を嘗て何処かで見た事がある様な気がした。確かに見たと、誰やら耳の中で囁く。盛岡——の近所で私は生れた——の、内丸の^{おほどほり}大達^{おほだち}がパツと目に浮ぶ。中学の門と斜^{はす}に向ひ合つて、一軒の理髮^{とこや}床があつたが、其前で何日かしら菊池君を見た……否、アレは市役所の兵事係とか云ふ、同じ級の友人のお父^{とうさん}様の髭だつたと気がつく。其頃私の姉の家では下宿屋をして居たが、其家^{そこ}に泊つて居た髭……違ふ、違ふ、アノ髭なら氣仙^{けせん}郡から来た大工だと云つて、二ヶ月も遊^{つき}んでから喰^く逃^{にが}して北海道へ来た筈だ。ト、以前^{もと}私の居た小樽の新聞社の、盛岡生れだと云つた職工長の立派な髭が頭腦^{あたま}に浮ぶ。若しかすると、菊池君は何時か私の生れた村の、アノ白沢屋とか云ふ木賃宿の縁側に、胡坐をかいて居た事がなかつたらうかと考へたが、これも甚だ不正^{ふたしか}確^かなので、ハテ、何処だつたかと、気が少し苛^{いら}々^{いら}して来て、東京ぢやなかつたらうかと、無理な方へ飛ぶ。東京と云へば、私は直ぐ、須田町——東京中の電車と人が四方から崩^{なだ}れる様に集つて来る須田町を頭腦^{あたま}に描くが、アノ雑沓^{つぱど}の中で、菊池君が電車から降りる……否、乗る所を、私は余^よ程遠くからチラリと後姿を……無理だ、無理だ、電車と菊池君を密接^{くつ}けるのは無理だ……

…。

『モウ起きなさいよ、十一時が打つたから。那そんなに寝てて、貴方何考へてるだべさ。』

と、取つて投げる様な、瘤高い声で云つて、お芳が入つて来た。ハツとすると、血が頭からスーツと下つて行く様な、夢から覚めた様な気がして、返事もせず、真面目な顔をして黙つて居ると、お芳も存外真面目な顔をして、十能の火を火鉢に移す。指の太い、あかぎれ靴だらけの、赤黒い不恰好な手が、急がしさうに、細い真鍮の火箸を動かす。手巾を欲しがつてる癖に……と考へると、私は其手巾を蒲団の中で、胸の上にシツカリ握つてゐる事に気がついた。ト、急に之をお芳に呉れるのが惜しくなつて来たので、對手にそれを云ひ出す機会を与へまいと、寝返りを打たうとしたが、怎したのか、此瞬間に、お芳の目元が菊池に酷よく似てると思つた。不思議だナと考へて、半分廻しかけた頭を一寸戻して、再またお芳の目を見たが、モウ似て居ない。似る筈が無いサと胸の中で云つて、思切つて寝返りを打つ。

『私の顔など見たくもなかべさ。ねえ、橘さん。』

『何を云ふんだい。』

と私は何気なく云つたが、ハハア、此女が、存外真面目な顔をしてる哩わいと思つたのは、ヤレ／＼、これでも一種の姿態しなを作つて見せる積りだったかと気が付くと、私は吹出したく

なつて来た。

『フン。』

とお芳が云ふ。

私は、顔を伏臥^{うつぶ}す位にして、呼吸^{いき}を殺して笑つて居ると、お芳は火を移して了つて、炭をついで、雑巾で火鉢の縁を拭いてる様だつたが、聴^{やが}て鉄瓶の蓋を取つて見る様な音がする。茶器に触る音がする。

『喉が渴いて渴いて、死にぞだてがらに、湯ば飲まねえで何考へてるだかな。』
と、独^{ひとりごと}語の様に云つて、出て行つて了つた。

四

社長の大川氏も、理事の須藤氏も、平生「毎日」の如きは眼中に無い様な事を云つて居て、私が初めて着いた時も、喜見^{きけん}とか云ふ、土地^{ところ}で一番の料理屋に伴れて行かれて、「毎日」が仮令^{たとへど}甚^{んな}事で此方に戈を向けるにしても、自頭^{てんで}対手にせぬと云つた様な態度で、唯君自身の思ふ通りに新聞を拵へて呉れば可い、「日報」の如く既に確実な基礎を作つた

新聞は、何も其日暮しの心配をするには当らぬと云ふ意味の事を懇々と説き聞かされた。高木主筆は少し之と違つて居て、流石は創業の日から七年の間、「日報」と運命を共にして来て、（初めは唯一人で外交も編輯も校正も、時としては発送までやつたものださうだが、）毎日々々土地ところの生きた事件を取扱つて来た人だけ、其説には充分の根拠があつた。主筆は、北海道の都府、殊にも此釧路の発達の急激な事に非常の興味をもつて居て、今でこそ人口も一万五千に満たぬけれど、半年程前に此処と函館とを繋いだ北海道鉄道の全通して以来、貨物の集散高、人口の増加率、皆月毎に上つて来て居るし、殊に中央の政界までも騒がして居る大規模の築港計画も、一両年中には着手される事であらうし、池田駅から分岐する網走あばしり線鉄道の竣工した暁には、釧路、十勝、北見三国の吞吐港どんとうとなり、単に地理的事情から許りでなく、全道に及ぼす経済的勢力の上でも釧路が「東海岸の小樽」となる日が、決して遠い事で無いと信じて居た。されば、此釧路を何日までも「日報」一つで独占しようとするのは無理な事で、其為には、却つて「毎日」の如き無勢力な新聞を生さず殺さずして置く方が、「日報」の為に恐るべき敵の崛起くつきするのを妨げる最良の手段であると云ふのが此人の対「毎日」観であつた。

にも不かかはらず拘、此三人の人は、怎したもののか、何か事のある毎に、「毎日」の行動に就

いて少からず神経過敏な態度を見せて、或時の如きは、須藤氏が主として關係して居る漁業団体に、内訌ないこうが起つたとか起りさうだとか云ふ事を、「毎日」子が何かの序ついでに仄めかした時、大川氏と須藤氏が平生いっになく朝早く社にやつて来て、主筆と三人応接室で半時間も密議してから、大川社長が自分で筆を執つて、「毎日」と或關係があると云はれて居る私立銀行の内幕を剔あぐつた記事を書いた。

が、私が追々と土地とちの事情が解つて来るに随つれて、此神経過敏の理由わけも讀めて来た。ト云ふのは、大川氏が土地とちの人望を一身に背負つて立つた人で、現に町民に推されて、（或は推させて、）道會議員にもなつて居るけれど、町が発達し膨脹すると共に種々いろんな分子が入交いりこんで来て、何といふ事もなしに、新しい人を欲する希望が、町民の頭腦あたまに起つて来た。「毎日」の西山社長は、正に此新潮に棹さして彼岸に達しようと思慮あせつて居る人なので、彼自身は、其半生に種々いろんな黒い影を伴つて居る所から、殆ど町民に信じられて居ぬけれど、長い間大川氏と「日報」の為に少からぬ犠牲を払はされて来て、何といふ理由わけもなしに新しい人を望む様になつた一部の勢力家、——それ自身も多少の野心をもたぬでもない人々が、表面うはべには出さぬけれど自然西山を援ける様になつて来た。私が大分苦心して集めた材料ざいりょうから、念の為に作つて見た勢力統計によると、前の代議士選挙に八分を占めて居た大

川氏の勢力は、近く二三ヶ月後に来るべき改選期に於て、怎^{どう}しても六分、——未知数を味方に加算して、六分五厘位迄に堕ちて居た。（大川氏は前には其得点全部を期日間際になつて或る政友に譲つたが、今度は自身で立つ積りで居る。）最も、残余の反対者と云つても、これと云ふ統率者がある訳で無いから、金次第で怎でもなるのだが。

で、「毎日」は、社それ自身の信用が無く、随つて社員一個々々に於ても、譬へば料理屋へ行つて勘定を月末まで待たせるにしても、余程巧みに談判しなければ拒まれると云つた調子で、紙数も唯^{たつた}八百しか出て居なかつたが、それでも能く続けて行く。「毎日」が先月紙店^{かみや}の払ひが出来なかつたので、今日から其日々に一聯宛買ふさうだとか、職工^いが一^ち日になつても給料を払はれぬので、活字^{ケース}函^{ひつくら}を^{かへ}転覆して家へ帰つたさうだとか云ふ噂が、一度や二度でなく私等の耳に入るけれど、それでも一日として新聞を休んだ事がない。唯八百の読者では、いくら田舎新聞でも維持して行けるものでないのに、不思議な事には、職工の数だつて敢て「日報」より少い事もなく、記者も五人居た所へ、また一人菊池を入れた。私の方は、千二百刷つて居て、外に官衙^{やくしよ}や銀行会社などの印刷物を一手に引受けてやつて居るので、少し宛積立の出来る月もあると、目の凹^{くぼ}んだ謹^{つつま}直^{しや}家の事務長が話して居たが。……

私は、這こん 事情が解ると共に、スツカリ紙面の体裁を変へた。「毎日」の遣り方は、喇ラツツババぶぶし 叭節叭節を懸賞で募集したり、芸妓評判記を募つたり、頻りに俗受の好い様にと焦慮あせつてゐるので、初め私も其向うを張らうかと持出したのを、主筆初め社長までが不賛成で、出来るだけ清潔な、大人らしい態度で遣れと云ふから、其積りで、記事なども余程手加減して居たのだが、此頃から急に手を変へて、さうでもない事に迄「報知」式にドン／＼二号活字を使つたり、或る酒屋の隠居が下女を孕ませた事を、雅俗折衷で面白可笑しく三日も連つづき載物ものにしたり、粋界たねの材料たねを毎日絶やさぬ様にした。詰り、「毎日」が一生懸命心懸けて居ても、筆の立つ人が無かつたり、外交費が無かつたりして、及びかねて居た所を、私が幸ひ独身者には少し余る位収入みいりがあるので、先方むかうの路を乗越して先へ出て見たのだ。最初三面主任と云ふ事であつたのを、主筆が種々と土地の事業に係して居て急しいのと、一つには全七まる年の間同じ事許りやつて来て、厭いときが来てる所から、私が毎日総編輯をやつて居たので。

土地とちが狭いだけに反響が早い、為する事成す事直ぐ目に付く。私が編輯の方針を改めてから、間もなく「日報」の評判が急によくなつて来た。

慫こうなると滑稽をかしなもので、さらでだに私は編輯局で一番年が若いのに、人一倍大事がら

れて居たのを、同僚なかまに対して気恥かしい位、社長や理事の態度が變つて来る。それ許りではない、須藤氏が何かの用で二日許り札幌に行つた時、私に銀側時計を買つて来て呉れた。其三日目の日曜に、大川氏の夫人おくさんが訪ねて来たといふので吃驚びっくりして起きると、「宅に穿かせる積りで仕立させたけれど、少し短いから。」と云つて、新しい仙台平の袴わざわを態々ざ持つて来て呉れた。

袴と時計に慢心を起した訳ではないが、人の心といふものは奇妙なもので、私は此頃から、少し宛、現在の境遇を輕蔑する様になつた。朝に目を覺まして、床の中で不取敢とりあへず新聞を読む。ト、私が来た頃までは、一面と二面がルビ無しの、時としては艶種つやだねが二面の下から三面の冒頭あたまへ続いて居る様な新聞だつたのが、今では全紙すつかり総ルビ付で、体裁も自分だけでは何処へ出しても恥かしくないと思ふ程だし、殊に三面——田舎の読者は三面だけ読む。——となると、二号活字を思切つて使つた、誇張を極めた記事が、賑々にぎにぎしく埋めてある。フフンと云つた様な氣持になる。若しかして、記事の排列の順序でも違つてると、「永山の奴仕様がないな、いくら云つても大刷校正の時順序紙を見ない。」などと呟いて見るが、次に「毎日」を取つて見るといふと、モウ自分の方の事は忘れて、又候またぞろフンと云つた氣になる。「毎日」は何日いっでも私の方より材料たねが二つも三つも少かつた。取

分け私自身の聞出して書く材料が、一つとして先方に載つて居ない。のみならず、三面だけにルビを附けただけで、活字の少い所から仮名許り沢山に使つて、「釧路」の釧せんの字が無いから大抵「くし路」としてあつた。新聞を見て了つて、起きようかなと思ふと、先づ床の中から両腕を出して、思ひ切つて悠暢ゆつたりと身延のびのびをする。そして、「今日も亦社に行つてと……ええと、また二号活字を盛んに使ふかな。」と云ふ様な事を口の中で云つて見て、そして今度は前の場合と少し違つた意味に於て、フフンと云つて、軽く自分を嘲つて見る。「二号活字さへ使へば新聞が活動したものだと思つて、フン、処世の秘訣は二号活字にありかな。」などと考へる。

這こんな 気がし出してから、早いもので、二三日経つと、モウ私は何を見ても何を聞いても、直ぐフフンと鼻先であしらふ様な氣持になつた。其頃は私も余程土地慣れがして来て、且つ仕事の仕事だから、種々いろんな人に接触して居たし、随つて一寸普通なみの人には知れぬ種々な事が、目に見えたり、耳に入つたりする所から、「要するに釧路は慾の無い人と真面目な人の居ない所だ。」と云つた様な心地が、不断たえず此フフンといふ氣を助長たすけて居た。

モ一つ、それを助長けるのは、厭でも応でも毎日顔を見では済まぬ女中のお芳であつた。私が此下宿へ初めて移つた晩、此女が来て、亭主に別れてから自活して居たのを云々と話

した事があつたが、此頃になつて、不図した事から、それが全然根も葉も無い事であると解つた。亭主があつたのでも無ければ、主婦が強つて頼んだのでもなく、矢張普通の女中で、額の狭い、小さい目と小さい鼻を隠して了ふ程頬骨の突出た、土白の様な尻の、先づ珍しい許りの醜女の肥満人であつた。人々に向つて、よく亭主があつた様な話をするのは、詰り、自分が二十五にもなつて未だ独身で居るのを、人が、不容貌な為に拾手が無かつたのだとでも見るかと思つてゐるからなので、其女だから、何の室へ行つても、例の取て投げる様な調子で、四辺構はず狎戯る、妙な姿態をする。止宿人の方でも、根が愚鈍な淡泊者だけに面白がつて盛んに揶揄ふ。ト、屹度私の許へ来て、何番のお客さんが昨晚這事を云つたとか、那事をしたとか、誰さんが私の乳を握つたとか、夏になつたら浴衣を買つてやるから毎晩泊りに来いと云つたとか、それはく種々な事を喋り立てる。私はよく気の毒な女だと思つてたが、それでも此滑稽な顔を見たら最後、腹の虫が喉まで出て来て攪る様で、罪な事とは知り乍ら、種々な事を云つて揶揄ふ。然も、怎したのか、生れてから云つた事のない様な際敏い皮肉までが、何の苦もなく、咽喉から矢継早に出て来る。すると、芳ちゃんも屹度怒つた様な顔をして見せるが、此時は此女の心の中で一番嬉しい時なので、又、其顔の一番滑稽に見える時なのだ。が、私は直ぐ揶揄ふのが

厭になつて了ふので、其^{そのたんび}度、

『モウ行け、行け。何時まで人の邪魔するんだい、馬鹿奴。』

と怒鳴りつける。ト、芳ちやんは小さい目を変な具合にして、

『ハイ行きますよ。貴方^{あんた}の位^{くれえ}隔てなくして呉^{しと}れる人ア無えだもの。』

と云つて、大人しく出て行く。私は何日か、此女は、アノ大きな足で、「真面目」といふものの影を消して歩く女だと考へた事があつた。

社に行くと、何日でも事務室を通つて二階に上るのだが、余り口も利かぬ目の凹^{くぼ}んだ事務長までが、私の顔を見ると、

『今日は橘さんへ郵便が来て居なんだか。』

と受付の者に聞くと云つた調子。編輯局へ入つても、兎角私のフンと云ふ氣持^{そそ}を唆^{そそ}る様な話が出る。

其^{そんな}話を出さぬのは、主筆だけであつた。主筆は、体格の立派な、口髯^{いかめ}の厳しい、何処

へ出しても敗^{ひけ}をとらぬ風采の、四十年輩の男で、年より早く前頭の見事に禿げ上つてのは、女の話にかけると甘くなる性^{たち}な事を語つて居た。が、平生は至つて口少々な、常に鷹揚^{おだて}に構へて、部下^{した}の者の欠点^{あら}は随分手酷くやツつけるけれども、滅多に煽動^{おだて}の事のない人

であつた。で、私に対しても、極く淡泊に見せて居たが、何も云はねば云はぬにつけて、私は又此人の頭脳あたまがモウ余程乾ひからび涸ひて居て、漢文句調の幼稚な文章しか書けぬ事を知つて居るので、それとなく腹の中でフフンと云つて居る。

一体此編輯局には、他の新聞には余り類のない一種の秩序——官衙風やくしよな秩序が有つた。

それは無論何処の社でも、校正係が主筆を捉へて「オイ君」などと云ふ事は無いものだけれど、それでも普通ただの社会と違つて、何といふ事なしに自由がある。所が此編輯局には、主筆が社の柱石であつて動かすべからざる権力を持つて居るのと、其鷹揚おやくにんてきな官吏的な態度とが、自然さう云ふ具合にしたものか、怎かは知らぬが、主筆なら未だしも、私までが、「君」と云はずに「貴方」と云はれる。言語ことばのみでなく、凡ての事が然う云つた調子で、随つて何日でも議論一つ出る事なく、平和で、無事で、波風の立つ日が無いと共に、部下したの者に抑圧はあるけれど、自由の空氣ちつが些とも吹かぬ。

私は無論誰からも抑圧を享けるでもなく、却つて上の人から大事がられて、お愛嬌を云はれて居るので、随分我儘に許り振舞つて居たが、フフンと云ふ氣持になつて、自分の境遇を輕蔑して見る様になつて間もなくの事、——其そんな氣がし乍らも職務しごとには真面目なもので、毎日十一時頃に出て四時過ぎまでに、大抵は三百行位も書きこなすのだから、手を休

める暇と云つては殆んど無いのだが、——時として、筆の穂先を前歯で軽く噛みながら、何といふ事なしに苦虫を噛みつぶした様な顔をして居る事があつた。其時は、恰度、空を行く雲が、明るい頭脳あたまの中へサツと暗い影を落した様で、目の前の人の顔も、原稿紙も、何となしに煤すすんで、曇つて見える。ハツと気が付いて、怎して這そんな気持がしたらうと怪んで見る。それが日一日と数が多くなつて行く、時間も長く続く様になつて行く。

或日、須藤氏が編輯局に来て居て、

『橘君は今日二日酔ぢやないか。』

と云つた。恰度私が呆然ぼんやりと例の氣持になつて、向側の壁に貼りつけた北海道地図を眺めて居た時なので、ハツとして、

『否いいえ。』

と云つた儘、テレ隱しに愛想笑ひをすると、

『さうかえ、何だか氣持の悪さうな顔をして居るから、僕は又、何か市子に怨言うらみでも云はれたのを思出してるかと思つた。』

と云つて笑つたが、

『君が然うして一生懸命働いてくれるのは可いが、其為に神経衰弱でも起さん様にして呉

れ給へ。一体余り丈夫でない身体な様だから。』

私は直ぐ腹の中でフンと云ふ氣になつたが、可成平生の快活を装うて、

『大丈夫ですよ。僕は藥を飲むのが大嫌ひですから、滅多に病氣なんかする氣になりません。』

『そんなら可いが、』と句を切つて、『最も、君が病氣したら、看護婦の代りに市子を頼んで上る積りだがね。ハハハ。』

『そら結構です、何なら、チヨイ／＼病氣する事にしても可いですよ。』

其日は一日、可成くすんだ顔を人に見せまいと思つて、頻りに心にもない戯談を

云つたが、其事をすればする程、頭脳が暗くなつて来て、筆が洩る、無暗矢鱈に二号活

字を使う。文選小僧は『明日の新聞も景氣が可えぞ。』と工場で叫んで居た。

何故暗い陰影に襲はれるか？ 訝しいとは思ひ乍ら、私は別に深く其理由を考へても見

なかつた。が、詰り私は、身体は一時間も暇が無い程急がしいが、為る事成す事思ふ壺に

箆つて、鏡の様に風いだ海を十日も二十日も航海する様なので、何日しか精神が此無聊に

倦んで来たのだ。西風がドウと吹いて、千里の夏草が皆靡く、抗ふ樹もなければ、遮る山

もない、ト、風は野の涯に来て自ら死ぬ。自ら死ぬ風の心を、若い人は又、春の真昼に一

人居て、五尺の軒から底無しの花曇りの空を仰いだ時、目に湧いて来る寂しみの雲に読む。恋ある人は恋を思ひ、友ある人は友を懷おもひ、春の愁と云はるる「無聊の圧迫」を享けて、何処かしら遁路にげみちを求めむとする。太平の世の春愁は、肩で風切る武士さむらいの腰の物に、態わざと触つて見る市井の無頼児である。世が日毎に月毎に進んで、汽車、汽船、電車、自動車、地球の周囲まはりを縮める事許り考へ出すと、徒歩で世界を一周すると云ひ出す奴が屹度出る。

——詰り、私の精神こころも、徒歩旅行が企てたくなつたのだ、喧嘩の对手が欲しくなつたのだ。一月の下旬すゑに来て。唯ただ一月经つか経たぬに這こゝな氣を起すとは、少し氣早い——不自然な

様に思ふかも知れぬが、それは私の性行を知らぬからなので……私は、北海道へ来てから許りも、唯ただ九ヶ月の間に、函館、小樽、札幌で四つの新聞に居て来た。何どの社でも今の様に破格の優遇はして呉れなかつたが、其代り私は一日として心の無聊を感じた事がない。何か知ら企てる、でなければ、人の企てに加はる。其企てが又、今の様に何の障害さはりなしに行はれる事が無いので、私の若い精神は断間なく勇んで、朝から晩まで戦場に居る心地がして居た。戦ひに慣れた心が、何一つ波風の無い編輯局に来て、徐々そろそろ眠氣ねむけがさす程「無聊の圧迫」を感じ出したのだ。

這こゝな理由とも氣が付かず、唯モウ暗い陰影かげに襲はれると自暴やけに誇大な語ことばを使つて書く、

筆が一寸蹟くと、くすんだ顔を上げて周匝あたりを見る。周匝は何時でも平和だ、何事も無い。すると、私は穂先を嚙んでアラヌ方を眺める。

主筆は鷹揚に淡白あつさりと構へて居る。八戸君は毎日役所廻りをして来て、一生懸命になつて五六十行位雑報を書く。優しい髯を蓄へた、色白の、女に可愛がられる顔立で、以前もとは何処かの中学の教師をした人なさうだが、至極親切な君子人で、得意な代数幾何物理の割に筆は立たぬけれど、遊廓種となると、打つて変つて輕妙な警句に富んだものを書く、私の心に陰影かげのさした時、よく飛沫とばちりの叱言こごとを食ふのは、編輯助手の永山であつた。永山はモウ三十を越した、何日でも髪をペタリとチツクで撫でつけて居て、目が顔の両端にある、頬骨の出た、ノツペリとした男で、酔つた時踊の真似する外に、何も能が無い。奇妙に生れついた男もあればあるもので、此男が真面目になればなる程、其拳動やうずが吹き出さずに居られぬ程滑稽に見えて、何か戯談でも云ふと些ちつとも可笑しくない。午前は商況の材料取たねとりに店廻りをして、一時に警察へ行く。帰つてから校正刷の出初めまでは、何も用が無いので、東京電報を訳さして見る事などもあるが、全然頭まるでに働きの無い。唯五六通の電報に三十分も費して、それで間違ひだらけな訳をする。

少し毛色の変つてるのは、小松君であつた。二十七八の、髯が無いから年よりはズツト

若く見えるが、大きい声一つ出さぬ様な男で居て、馬鹿に話好きの、何日でも軽い不安に襲はれて居る様に、顔の肉を瘰癧ひきつけらせて居た。

此小松君は又、暇さへあれば町を歩くのか好きだといふ事で、市井の細かい出来事まで、殆んど残りなく聞込んで来る。私が、彼のか「毎日」の菊池君に就いて、種々の噂を聞いたのも、大抵此小松君からであつた。

其話では、——菊池君は贅沢にも棧橋前の「丸山」と云ふ旅館やどやに泊つて居て、毎日草鞋わらぢを穿いて外交に廻つて居る。そして、何処へ行つても、

『私は「毎日新聞」の探訪たねとりで、菊池兼治と云ふ者であります。』

と挨拶するさうで、初めて警察へ行つた時は、案内もなしにヅカ／＼事務室に入つたので、深野と云ふ主任警部が、テツキリ無頼漢か何か面倒な事を云ひに來たと見たから、

『貴様は誰の許可を得て入つたか？』

と突然怒鳴りつけたと云ふ事であつた。菊池君は又、時々職工と一緒にゐて酒を飲む事があるさうで、「丸山」の番頭の話では、時として帰つて来ない晩もあると云ふ。其そんな

時は怎も米町よねまち（遊廓）へ行くらしいので、現に或時の晩いつかの如きは職工二人許りと連立つて行つた形跡があると云ふ事であつた。そして又、小松君は、聯隊区司令部には三日置位

にしか材料たねが無いのに、菊池君が毎日アノ山の上まで行くと云つて、笑つて居た。

四時か四時半になると、私は算盤を取つて、順序紙につけてある行数を計算して、

『原稿出切。できり』

と呼ぶ。ト、八戸君も小松君も、卓子から離れて各々めいめい自分の椅子を引ずつて暖炉ストウフの周あ匝たりに集る。此時は流石に私も肩の荷を下した様で、ホツと息をして莨に火を移すが、軽いひもしさ空腹かへりしたくと何と云ふ事の無い不満足の情が起つて来るので、大抵一本の莨を吸ひきらぬ中に帰準備をする。

宿に帰ると、否でも応でもお芳の滑稽おどけた顔を見ねばならぬ。ト、其、何時いつ見ても絶えた事のない卑しい浅間しい飢渴の表情が、直ぐ私に、

『オイ、家の別嬪さんは今日誰々に秋波いろめを使つた？』

と云ふ様な事を云はせる。

『マア酷いよ、此人は。私の顔見れば、そな事許り云つてさ。』

と、お芳は忽ちにして甘えた姿態しなをする。

『飯持つて来い、飯。』

『貴方あんた、今夜も出懸けるのがえ？』

『大きに御世話様。』

『だつて主婦おかみさんが貴方の事心配してるよ。好え人だども、今から酒など飲んで、怎するだべて。』

『お嫁に来て呉れる人が無くなるツテ訳か?』

『マアさ。』

『ぢやね、芳ちやんの様な人で、モ些ちつと許りお尻の小さいのを嫁に貰つて呉れたら、一生酒を禁めるからツてお主婦さんにそ云つて見て呉れ。』

『知らない、私わし。』と立つて行く。

夕飯が済む。ト、一日手を離さぬので筆が仇敵かたきの様になつてゐるから、手紙一本書く氣もしなければ、書など見ようとも思はぬ。凝然じつらんとして洋燈ランテの火を見つめて居ると、断々きれぎれな事が雑然ごつちやになつて心を掠める。何時しか暗い陰影かげが頭脳あたまに拮はびこつて来る。私は、恚かうして何処へといふ確かな目的あてもなく、外套を引被ひっかけて外へ飛び出して了ふ。

這こんな 氣持がする様になつてから、私は何故といふ理由もなしに「毎日」の日下部君と親しく往来する様になつた。ト共に、初め材料たねを聞出す積りでチヨイ／＼飲みに行つたのが、此頃では其そんな 考へも無しに、唯モウ行かねば氣が落付かぬ様で、毎晩の様に華やかな絃歌

の巷に足を運んだ。或時は小松君を伴れて、或時は日下部君と相携へて。

星明りのする雪路を、身も心もフラ／＼として帰つて来るのは、大抵十二時過ぎであるが、私は、「毎日」社の小路の入口を通る度に、「僕の方の編輯局は全然^{まるで}梁山泊だよ。」と云つた日下部君の言葉を思出す。月例会に逢つた限^{きり}の菊池君が何故か目に浮ぶ。そして、何だか一度其編輯局へ行つて見たい様な気がした。

五

三月一日は恰度日曜日。快く目をさました時は、空が美しく晴れ渡つて、東向の窓に射す日が、塵に曇つた硝子を薄温かに染めて居た。

日射^{ひざし}が上から縮^{ちぢま}つて、段々下に落ちて行く。颯^{さつ}と室^{へや}の中が暗くなつたと思ふと、モウ私がチンと何処かで鳴つて、小松君が遊びに来た。

『昨晚怎でした。面白かつたかえ?』

『随分な入りでした。五百人位入つた様でしたよ。』

『釧路座に五百人ぢや、棧敷が危険いね。』

『ええ、七時頃には木戸を閉めツちやツたんですが、大分戸外で騒いでましたよ。』

『其そんなだつたかな。最も、釧路ぢや琵琶会が初めてなんだからね。』

『それに貴方が又、馬鹿に景気をつけてお書きなすツたんですからな。』

『其 事もないけれども……訝をしなもんだね。一体僕は、慈善琵琶会なんて云ふ「慈善」が大嫌ひなんで、アレは須すらく偽善琵琶会と書くべしだと思つてゐるんだが、それでも君、釧路みたいな田舎へ来ると、怎も退屈で退屈で仕様がなないもんだからね。遂ついソノ、何かしら人騒がせがやつて見たくなるんだ。』

『同意まつたくですな。』

『孤児院設立の資金を集めるなんて云ふけれど、實際はアノ金村ツて云ふ琵琶法師も喰くせ者に違ひないんだがね。』

『でせうか？』

『でなけや、君、……然うく、君は未だ知らなかつたんだが、昨日彼奴あいつがね、編輯局へビールを、一打ダース越したんだよ。僕は癪に触つたから、御好意は有難いが此代金も孤児院の設立資金に入れて貰ひたいツて返してやつたんだ。』

『然うでしたか、怎も……』

『慈善を餌に利を釣る。巧くやつてるもんだよ。アノ旅館やどやの贅沢加減を見ても解るさね。』

『其そんな事があつた為ですか、昨晚頻りに、貴方がお出にならないツて、金村の奴心配してましたよ。』

『感付かれたと思つてるだらうさ。』

『然うく、まだ心配してた人がありましたよ。』

『誰だえ？』

『市ちゃんが行つてましてね。』

『誰と？』

『些ちつとは御心配ですか。』

『馬鹿な……ハハハ。』

『小高に花助と三人でしたが、何故お出にならないだらうツて、
眞実ほんとに心配してましたよ。』

『風向が悪くなつたね。』

『ハツハハ。だが、今夜はお出になるでせう？』

『左様、行つても好いけどね。』

『但し市ちゃんは、今夜来られないさうですが。』

『ぢや止さうか。』

と云つて、二人は声を合せて笑つた。

『立つて聞きましたよ。』

と、お芳が菓子皿を持つて入つて来た。

『何を？』

『聞きましたよ、私。』

『お前の知つた人の事で、材料が上つたツて小松君が話した所さ。』

『嘘だよ。』

『高見さんを知つてゐるだらう？』と小松君が云ふ。

『知つて居りますさ、家に居た人だもの。』

『高見ツてのは何か、以前社に居たとか云ふ……？』

『ハ、然うです。』

『高見さんが怎かしたてのかえ？』

『したか、しないか、お前さんが一番詳しく知つてゐる筈ぢやないか？』

『何云ふだべさ。』

『だつて、高見君が此家このうちに居たのは本当だらう。』

『居ましたよ。』

『そして。』

『そしてつて、私何も高見さんとは怎もしませんからさ。』

『ぢや誰と怎かしたんだい？』

『厭だ、私。わし』

と、足音荒くお芳が出て行く。

『馬鹿な奴だ。』

『天下の逸品ですな、アノ顔は。』

『ハハハ。みんなからかは皆に揶揄れて嬉しがつてゐるから、可哀相にも可哀相だがね。餓ゑたる女と云ふ

奴かな。』

『成程。ですけれど、アノ顔ぢや怎も、マア揶揄からかつてやる位が一番の同情ですな。』

『それに余程よっぽどの氣紛もんれ者でね。稼とぎ出すと鼻唄もをやり乍ら滅法稼いでゐるが、怠け出した

ら一日主婦おかみに怒鳴られ通しでも平気なもんだ。それかと思ふと、夜の九時過に湯へ行つて来て、アノ階段はしこの下はしこの小さな室で、一生懸命お化粧つくりをしてる事なんかあるんだ。正直には正直な様だがね。』

『そら然うでせう。アノ顔で以て不正直と来た日にや、怎もありませんからね。』
と云つて、小松君は暫らく語ことばを切つたが、

『さうく、「毎日」の菊池ですね。』
『呟うん。』

『アノ男は怖い様な顔してるけれど正直ですな。』

『怎して?』

『昨晚矢張琵琶会に来てましたがね。』

〔生前未発表・明治四十一年五月稿〕

青空文庫情報

底本：「石川啄木全集 第三卷 小説」筑摩書房

1978（昭和53）年10月25日初版第1刷発行

1993（平成5年）年5月20日初版第7刷発行

※生前未発表、1908（明治41）年5月執筆のこの作品の本文を、底本は、市立函館図書館所蔵啄木自筆原稿によっています。

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2008年10月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

菊池君

石川啄木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>